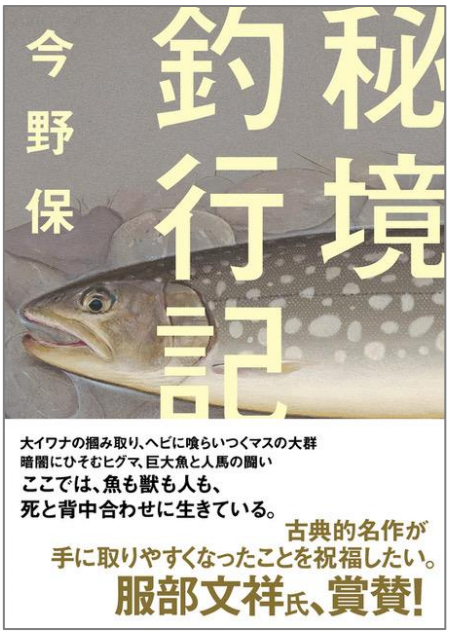
各　　位

2025 年 2 月 18 日
株式会社 山と溪谷社
https://www.yamakei.co.jp/

探検家のバイブル！戦前の日高の奥地、想像を絶する生と死のドラマ『秘境釣行記』発刊！

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、ヤマケイ文庫『秘境釣行記』（今野保：著）を発刊いたしました。



服部文祥氏、賞賛！
古典的名作が手に取りやすくなったことを祝福したい。

「激しさと穏やかさが、さも当然といった風に共存する山の姿を垣間見て、私は心の殻がはがれて、それが剝き出しになるような戦慄（おののき）を感じていた。川の流ればかりではない。ここでは、魚も獣も人も、死と背中合わせに生きている。ちょっとした油断、そして恐らくは抗いようのない偶然が、それらの生を死へとすり替えてしまうのだ。」（本文より）

濃霧の中の山越え、沢を走る鉄砲水の恐怖、摑み取りできるほど大量のイワナ、一日で百匹を超すヤマベ釣り、暗闇にひそむヘビ・タカ・ヒグマ、目の前で宙を飛び滝壺に消えていった巨大イワナの勇姿――かつて北の奥地にあった圧倒的な自然を描き、「喰う・喰われる」の掟に従ってひしめきあう生命に心が震える。

『アラシ』『罷吼ゆる山』に続く好評シリーズの完結作。解説／服部文祥。

面持ちで小さく頷き、右手の岩場の向こうへ目をやった。

そこは、長瀬から流れ込んだ水が左へカーブするところにできた、入り江のような溜りで、ぐるりを岩で囲われ、青々とした水を湛えている。

二人は足音を忍ばせて、なおもそこへ近寄っていった。バシャッと水の跳ねる音がした。足を停め、溜りを見下ろした私は、ハッと息を呑み、立ちすくんだ。

溜りの岸の岩の上に一本の細いヤチダモの木が生えていて、その木の上の方に大きな縞蛇がぐるぐると身を巻きつけ、水中の獲物を眈々と狙っている——。もっとよく見える位置に移るべく二人が一段下の岩に降りた直後、またバシャッと水音がした。反射的に目を向けると、水中に黒っぽい影が沈んでゆくのが見えた。はっきりとは識別できないが、それは大きさからみて先刻の鱒と同じものと思われた。

また魚が上がってきた。やはり鱒だ。数匹はいる。背鰭で水面を切るほどに浮き上がり、時にギラッと閃いて体を反転させたかと思うと、その中の一匹が飛沫とともに跳び上がった。なんと、鱒の側も、蛇を狙っているのだ。

鱒の背鰭が水面から出たとき、蛇はサッと鎌首を伸ばして襲いかかる。すると、すかさず鱒が蛇に跳びつく。だが、そのときにはもう蛇は首を引っ込めており、両

者とも相手を捉えきれぬまま鍔を削っている。しかし私は、この戦いは鱒のほうに分があると見た。なぜなら、蛇がからみついているヤチダモの木は、細いうえに、鎌首を伸ばすたびに撓るほど弱々しい。これでは足掛かりにすらならないのではないか。

そのうち、うまくタイミングが合ったらしい、蛇の牙が浮上した鱒の背鰭に掛かった。動きを遮られた鱒はバタバタと水面でもがき、それを持ち上げるべく蛇が首を引こうとした。だが、鱒の重みが加わって、ヤチダモの木は水面近くまで撓い、みるまに下がっていった。そのとき、別の鱒が横から蛇に跳びついて首根をくわえ、ガバッと一跳ねした。ヤチダモの梢が蛇の頭部もろとも水中に潜り、しばらくして木が元の位置に跳ね上がったときには鱒の姿はなく、首をだらりと下げた蛇が胴体を鈍く動かしながら頭部を引き上げようと足掻いていた。

一瞬後、深みからまっしぐらに浮上した鱒が、水面を割って高々と跳び上がり、蛇の頭をくわえるや飛沫を上げて落下した。またもや木が撓って、蛇の頭は水中に没し、木が跳ね上がると、再び鱒が跳びかかって蛇を水中に引き込んだ。

こんな攻撃を幾度も繰り返されて、蛇はしだいに膂力を失い、やがて木にから

みつけた胴体が滑るように伸び始めてズルッ、ズルッとみるまにほどけ、しまいには何の抵抗もなくスーッと水中に引き込まれていった。

いくばくも経ずして蛇はロープ状の物体のように浮き上がり、水面にたゆたうかに見えたが、それを追って深淵から迫った鱒にがっちりとくわえられ、水底へ消え去った。波紋が広がって岸に達すると、辺りは急に静まり返った。

二人はしばらくその場に佇み、黙りこくったまま青い溜りを見つめていた。私には、たった今、目にしたことが白昼の夢であったかと、あるいは見てはならぬものを見てしまったかのように、思えてならなかった。

鱒は、あの大鷹と同様に蛇を喰うのだろうか。蛇は、丸呑みにできそうもない大きな鱒に、なぜ戦いをいどんだのであろうか。いくら考えても自分には判らない。いったい、この原生林に覆われた山々に自分が知らずにいる事柄はどれほどあることか——私は、そんな思いを胸に刻みつつ、友ちゃんとともに帰りみちを急いだ。

5　ふたたび東の川へ

明くる昭和八年、季節は巡って北の山々にも夏が訪れていた。七月十日までに父は急ぎの用事を終わらせ、帳場をあずかる私も、二十五日前後に帰宅すれば炭の受け入れや帳簿の締切りもできるよう、十日までに段取りをつけた。こうして、待ちに待った染退川への釣りの旅は、今年も十五日間の予定で敢行されることになり、出発は十一日未明、メンバーは去年と同じ五名と決まった。

その日三時に咲梅（さばい）の家を発った一行は、ピリカイの蹴揚さんの家で一服した後、すぐに出発して一路、三石（みついし）川の上流をめざした。最初の二股では去年と同じく左の沢へ進み、次の二股では去年と違って右の沢に入った。そこから先は初めて通る沢筋だが、そこを登り詰めて山を越えれば間違いなく東の川（メナシベツ）に達するとの確信があった。

ただひとつの気掛かりは、歩きづらいか否かが不明なことであった。しかしそのルートは、去年の今頃、清水沢造たちが辿って路の沢に達しており、人がまるで通

■内容

1 母なる川よ　染退川へ／無言の教え／行く人、来る人／自然の戦い／ふたたび東の川へ／鱒の群れ／大きなヤマベ／ペンケホカイ／大水／迷い人
2 奥地へ　悪夢／三叉へ／岩上の危機／濃霧の山越え
3 燃ゆる渓　他流試合／巨大魚／渓流に帰る／雨の徳富川／黄金川
解説　服部文祥

■著者略歴

今野保（こんの・たもつ）
1917 年、北海道早来町生まれ。奥地での製炭業を経て、1937 年から 26 年間炭鉱に勤務。その後、室蘭にて土木会社を設立。1984 年に事故で右手を負傷するが、入院中に左手で文字を書く練習を行い、その後、執筆活動を始める。著書に『渓流の想い出』『染退川追憶』（以上、私家版）、『アラシ—奥地に生きた犬と人間の物語』『羆吼ゆる山』『秘境釣行記』がある。2000 年、逝去。

■書誌データ

書名：ヤマケイ文庫『秘境釣行記』
著者：今野保
発売日：2025 年 2 月 18 日
定価：1210 円（本体 1100 円＋税 10%）
344 ページ／文庫判／１色刷
https://www.yamakei.co.jp/products/2825050040.html

【山と溪谷社】　https://www.yamakei.co.jp/
1930 年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。
さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】　https://www.impressholdings.com/

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】
株式会社山と溪谷社　担当：綿
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング
TEL03-6744-1900　E-mail: info@yamakei.co.jp
https://www.yamakei.co.jp/